

---

# 魔法人間（マジックロボット） ～フタリになるまでの数日間～

M i n k

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジックロボット  
魔法人間 ～フタリになるまでの数日間～

### 【Nコード】

N3755D

### 【作者名】

Mink

### 【あらすじ】

今から幾年か後の話。タカムネ博士が人間の限界まで近づけたロボット『魔法人間<sup>マジックロボット</sup>』が世界中に製造されていた。魔法人間は人間のように自分で行動し、自分で考える。ただ一つ…人間より位が下ということを除いては。ある日、『人間暗殺者』と名乗る男が世界を征服し始めた！世界はどうなってしまうのか…

## 1 目 博士との出会い（前書き）

「少年」が「博士」に出会った日。

## 1日目 博士との出会い

「さあどつする。一一つに一一つだ。」

「……そんなことできるワケねーだろ！」

マサトが走る。『人間暗殺者』に向かってゆく。

「や、やめろおお！」

[illegible]

今からそう遠くない未来。この世に『マジックロボット 魔法人間』が製造された。制作者はタカムネ博士。超のつく変わり者のジーさんだ。

マジックロボット  
魔法人間は、人類が激減している現在<sup>いま</sup>、人間により忠実に作られたロボットだ。

人間と同じように生活し、人間と同じように家族を作る、ハズだった。

いや、それがタカムネ博士の信念だったのだ。

人類は今、欲望に満ちあふれている。「友達用」と「新家族用」に作られたはずなのに、万を超える会社が「奴隷用」として使っているのだ。

博士はこのヒトがいない世界、子どものできない夫婦、そして友達のできない子に喜んでもらえればそれで良い……そう思っていた。

だからこそ、国や都から、いや今は全国合併令で国一つだが、寄付金をもらって無料に近い金額で配布をしているのだ。

でも現実には違った。

忠実に働いてくれる「奴隸」でしかないのだ。

少しでも抵抗すれば……

[illegible]

「おじやまします……」

・  
・  
・  
誰もいないのかな。

僕はコンクリートの扉を少し開けた。

「あのだれか……」

ボンツツツツツ！

「うわあッ！」

んだよいきなり！てか、不法侵入者〓殺！  
ていう方程式が成り立ってんのか？

「おお、すまんの、新しい研究の失敗じゃ。」

「け、研究？」

今の、僕に対してだよ。

中から声がした。よかった……人がいた。

さっきみたいな爆発（？）がないことを祈りながら、僕は声が聞こえる方へと進んだ。

中は意外と広いが、なかなかの地獄絵図だった。壁をコンクリートで固めているのにもかかわらず、あちこちがぼろぼろになっている。

部屋の中は、常にやけにどす黒い煙が漂っている。そして一番の大惨事は…その中心にいるじじいだ。

頭は真っ白けっけ。でも頭のとっぺんに火がついている。目にはグルグルメガネ。でもその分厚いメガネが割れている。そしてその人の格好は…寒くないのか、ほぼ裸に近い。

「あ、すみません……」

僕はおそろおそろ声をかけた。

「よし、次の実験はどうしようかのお……」

え？無視？そっちから声をかけてながら無視ですか？

その明らかに危険いっぱいの物体は僕のことには目もくれていない……  
てゆーか、見えてない。

「次は、このカエルにコーラと納豆を混ぜて……」

[illegible]

いつもでは考えられない声を聞いて、やっとその物体はこっちに  
気付いた。

「？」

しかしじじいは首をひねって1.2秒。

- 
- 
- 
- 

「かぜかのお」

「ありえねーだろ！どこにこんな胸くそ悪い風？風邪？いやどっちでも良いけど、とにかく気付いてくださいよ！」

「ん？誰じゃ、お前。」

ここまで言うてやつと鈍い反応を見せた。

これがタカムネ博士との初めての出会いだ。

## 1日目 博士との出会い（後書き）

雰囲気を変えてまた新しく始めました。 （昔の小説のリメイクです） 並行して「14歳の恋愛日記」もヨロシクです。 （ここで宣伝  
…）

## 2目 少年のこと、博士との会話（前書き）

「少年」の事情と、「博士」との話。

## 2日目 少年のこと、博士との会話

僕の名前はユタカ。

分厚いメガネ、『2』に見える手のひらのアザしか特徴がない。  
歳は15。

別にもてるような格好いい顔でもないし、…ま、はっきり言って  
童顔、地味男だな。

父と母は物心ついた時からいない。

たった一人の友達、ミユキも同じ環境に育った。  
体つきもまるで双子のようにそっくりなのだが、  
ただ一つ違うのは・・・手のアザが『3』のように見えることぐ  
らいだ。

メガネはかけてない。髪は腰のちよつと上くらい。  
顔は、…結構可愛いかな。僕とは大違いだ。

僕らは何故か一日ぐらい食事を抜いても平気な体をしている。  
ま、父さんも母さんもないしね。お金ないし。  
え、他の日のご飯はどうしてるかって？

この国はまさに飽食…もとい放食大国。

そこら辺に食べ物落ちている。

それだけじゃなく、道路に落ちているお金で一食分が摂れるくら  
い食べ物がい。

食べ物だけじゃない。

テレビ、冷蔵庫、家までも、余るほど生産されている。

それもこれもこの人・・・タカムネ博士が開発した魔法人間のせ  
いだ。（って言ってもその事を聞いたのはだいぶ後だけだね。）  
マジックロボット

せい・・・せいなのだろうか。

いつかはロボットが強くなり、ニンゲンの上に立つのではないか・  
・僕はそう思っていない。

[illegible]

ま、それはさておき。

昨日は強すぎる威圧感に負け、オリンピックに出れるほどの勢いで走り帰った。帰ってしまった。

そして、今日。

「おじやまします…」

昨日の今日で、自分の体が言うこと聞かない。寒くないのに、ふ  
るえが止まらない。

今日こそはちゃんと挨拶しなければ……

「よし、今日はカエルとオレンジジュースとふむ…コオロギの死骸を加えてみようかな…」

「わあああああつ！おまえ馬鹿だろ！」

口の悪さがでてしまった。

「ん？誰じゃおまえは。」

2回目かよ！

今回はここで（実験に使われる！）と本能で感じ帰ってしまったが、今回はぐっとこらえ話しかけてみた。

「あの、今ちよつといいですか？」

「ちょっと待ってくねんか、今残っている食べ物で今日の晩飯を作

「カエルやコオロギを食事に使ってんのかよ！てゆーか、その晩飯絶対美味くねーよ！」

[illegible]

「あの、今日……いや、昨日からお隣に住むことになりました、ユタ力です。」

「君のお友達に、ミユキっていう友達がいらないかい？」

「い、いや……昨日、君と同じように挨拶にきて、今日も遊びに来てくれたの。寂しがってて、ワシのところに転がり込んでな……」

「そんな訳ないでしょ。  
…ヤッホー、ユタカ♪」

話を聞けば、ミユキはユタカにしか友達がいなかったことに悩み、博士に相談しに行ったという。

それで今……ケイトという友達用魔法人間を特別にもらい、一緒に暮らしているという。

どうじゃ、ケイトと双子の成長型の『マサト』がいるんじゃないが……

もちろん15歳に設定しておる。どうじゃ？」  
「それから…世界が変わり始めたのは。」

## 2日目 少年のこと、博士との会話（後書き）

全体の形が、だんだん見えてきたと思います。こっから、シリアスな場面と、コミカルな場面になってきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3755d/>

---

魔法人間（マジックロボット） ～フタリになるまでの数日間～

2010年12月2日15時13分発行